

美學の基礎に就ての考察 (承前)

深 田 康 算

二

美學が如何なる學的特性を有するかの問題に答へる爲めに、前節述ぶる所の如く、反應學と純粹記述學との二分法の上に立つて、美學は果して此孰れに屬するかを考へて見るならば、美學が少くとも反應學には屬しないと云ふ事だけは直ちに明かになるであらう。ハイマンに依れば、反應學即ち經驗的科學とは、物心二界若しくは主客兩觀の形に置かれた現實的經驗を可能ならしめる所の原理(概念)を與へるものであつて、同時に現實的經驗の組み立てられたる體系即ち意味の領域に外ならない。

さう云ふ體系として、ハイマンは、物理學、倫理學、法律學、醫學及び心理學 *Physik, Ethik, Jus, Medizin, Psychologie* を反應學として數へて居る。而して美學上の諸概念の構成が、是等の經驗的諸科學に於ける概念構成と同様でないこと、従つて美若しくは美醜と呼ぶるゝ性質が、是等の科學の構成した概念に基いて、夫等の領域に屬する經驗から、

規定せられ得ぬものなることを、次の様に論證して居る。

先づ第一には、健康と疾病、道德と不道德、實在と非實在などの概念、及び其他是等と同じ系列に含まるゝ色々の概念例へば功利、類型、理想、非實在的假象の如きに依つて、美的性質を摘出規定し得べしとは、今日何人も考へないであらうからして、之に就ては最早多くを辨明する程の必要もないであらう。次ぎに、所謂客觀的屬性に就て云へば、吾々が平常（即ち單なる自然記述 *Naturbeschreibung*）若しくは、現實的經驗の素朴なる記述に於て物の性質として數へ舉げる諸屬性は——其中美的性質に親密なる關係を有する如く考へられてゐる所の所謂外部的屬性、例へば大さとか形狀とか關係とか色彩とかでさへも、さうであるが——普通はやはり、云ふ迄もなく、外物の屬性即ち物の有する性質と見做されて居る。物に屬する性質である故に、而して物に屬する性質と見られて居る限り、是等の屬性は、當然概念的若しくは數學的自然科學的記述の領域に組み入れられ又其中に組み立てられ得る。斯く概念的若しくは自然科學的に組み立て得らるゝ限りに於ては、物の性質は其所謂外部的屬性でさへも美的性質とは全く何等の關係も無いものと云はなければならぬ。何故ならば、美的性質に密接な關係を有すると考へられて居る外部的屬性でさへも、之れを自然科學的

規定と見るならば、夫自ら決して美的意味を持つて居るのでは無い。例へば黄金截斷とか四邊形とか圓などの有する比例は、比例其ものに何等美的意味があるのでなくして、自然科学的(數學的)には同じ一つの比例であつても、或場合には美的意味を缺き、或場合には美的意味が生ずる。夫が美的意味を持つやうになるのは、其比例が直接に感覺的に捕捉せらるゝ場合にのみ限るのである。夫れであるからして、或一つの四邊形が美的だと認められる時、吾々が美的と認める所のものは、必しも其四邊形の實際の形若しくは測定せられ得る比例其ものを指すのではなくして、感覺的に捕捉された其四邊形の姿云はば實際在る處の四邊形ではなくして、單に吾々の眼に映じた四邊形の影を指して美的だと認めるのである。夫れであるからして又、見られたる四邊形が美的だと認められた時は、假令實際に於て其形は四邊形でないことが明かになつたとしても、或は又其比例が吾々の眼にさう見えたと比例と事實上異つてゐることが確かめられたとしても、——極言すれば、彼四邊形が單に吾々の幻覺に過ぎなかつたとしても——其美的意味は少しも變らないのである。

上述の如くであるからして、醫學上、倫理學上、法律學上及び物理學上の諸概念に依つて、美的性質を規定することは出来ない。又物の客觀的屬性に依つて之れを説明

することも出来ない。つまり、美的なるものゝ特性は、吾々に知られて居る總ての判斷ダイルスカテゴリーエンの種類の中には見出すことの出来ないものと云ふべきである。然らば之れを種類の心理的結果と見ることが出来るであらうか。美的性質とは客觀的な物の有する屬性ではなくして、物が吾々の心に及ぼした主觀的印象であると見て、例へば吾々の感情の上に印せられた一種の結果であるとして規定することが出来るであらうか。美的だと云ふことは兎に角一種の満足であるに相違ない。而して満足不満足と云ふ詞には、夫れが斯かる感情的印象に外ならぬと云ふ事を含んで居るやうにも見える。例へば、無生物にせよ、生物にせよ、健康體にせよ、病人にせよ、道德的行爲にせよ、又は單なる身體的動作にせよ、夫れ等の物、若しくは客觀的意味を有する内容は客觀的には同一であるに拘はらず、夫等が吾々の心に及ぼす結果若しくは印象若しくは影響は色々であり得る。或は或行爲に向はうとする意志を刺戟することもある。或は概念的認識に向はしめると云ふ結果を生ずることもある。而して或は又單に吾々の感情の上に働くに止まるといふ事もあらう。夫等の印象若しくは影響の中、吾々の感情の上に働いて起つた所の結果、之れが即ち美的なるものゝ特性であると見て、美的性質を此意味で純粹主觀的な印象であると主張する學者も少

くはない。尤も斯く主觀的な感情の上の印象であると見る人々の中にも、其感情を實際的(反應的)感情と見做すものもあり、又之れを模倣的(感情的)感情、内部的模倣若しくは感情移入であると見做すものもある。又是等の感情が夫々の場合に夫々種々な姿を呈すること、夫々異なりたる對象に随つて夫々異なりたる感情の現はるゝこと、乃至個性の差異に随つて各人の感情的印象の同じくないこと等も研究せられ得るであらう。然しながら是等の見解や研究に對して指摘さるべき根本の難點は、夫等の考察に依つては、畢竟其感情と云はるゝものゝ何處に特に美的なる特性があるかを規定し得ぬのではないかと云ふ點、換言すれば、學としての美學は果して何を意味するやを決定し得ぬのではないかと云ふ點に存する。何故ならば、美的とは即ち主觀的(感情的)満足(満足)である、心理的印象であると云ひ得た所で、例へば道德的行爲も亦吾々の感情の上に満足(満足)と云ふ印象を與へ得る。而して夫れに依つて道德的行爲は決して美的意味を有し來るとは云へない。此際の満足(満足)と云ふ感情の上の印象は、やはり何處までも道德的(道德的)感情たるに止まるのである。又感情移入説の立場に就て云ふならば、勿論吾々は或行爲に感情を移入して、共に悦び或は共に苦しみ得る故に感情移入と云ふ事は確かに事實であると承認しなければならない。然しな

から感情移入は其儘美的なりとは云ふとは出来ないであらう。感情移入の中に美的なるものと美的ならざる感情移入とを區別しなければならぬとは、已に移入論者も認容しなければならぬ程に、明瞭ではないか。感情移入が其儘即ち美的なるものゝ本質だとは云へない。

上述の如くなれば、美的なるものゝ本質は何ぞと云ふ問題は、一方に於ては客觀的對象から、他方に於ては主觀的印象から、此孰れの方面からも解決することは出来ないといふべきである。之に於て吾々は所謂經驗的科學即ち反應學に依りては、美的性質は規定せられ得ぬと云ふ結論に到着するのである。

〔附〕 ハーマンの議論を此所まで辿つて來た者の心に浮ぶであらう所の多くの疑問の中、後段の敘述に依りて自ら解決せらるゝ部分例へば美的なるものは果して感覺的に捕捉せられたるものと云ひ得べきか、又所謂客觀的屬性と感覺的印象との關係は如何と云ふ如きに就ては勿論今此所で論じて置く必要はない。

反應學と純粹記述學との二分法に就ての論も今暫らく之れを措く。唯之れに關しては、云ふ迄もなく此二分法の問題は學術に就ての根本的問題であること、

及びハーマンの論述の上丈けに就て見れば、學問の分類の問題に關して、尙幾多の考ふべき點が開け放されて居ることを注意するに止める。直接に上述のハーマンの議論に關係ある而して此所で特に附記し置かなければならぬと思はるゝは、心理的美學に關する二つの事柄、即ち一は美學は心理學なりやの問題、二は感情移入説の問題に就てである。一方に於て、美が心理學的には規定せられ得ぬと云ふハーマンの議論に賛同すると共に、他方に於て、感情移入説の所説を是認しなければならぬと考へる吾々は、此所でハーマンの論述の紹介を進める前に、此二つの點に就て少しく附記するの必要を感じざるを得ない。

(一)

美的性質の規定が心理學に依りては與へ得られぬと云ふ主張の眞意は、心理學的性質が今日尙曖昧である爲めに、學者の間に誤解を惹起し易く、從つて屢議論の燒點となつて居る。例へばフォルケルトが美學は心理學であると云ふ主張の如き、『美學體系』第一卷三一—一七頁、『悲壯美學』一一—一九頁、モイマンの心理學的美學の限界の論の如き、マックス・ハインツェ七十歲祝賀論文集一四六—一八二頁、『心理學的美學の限界』此論文の梗概は、上野學士に依りて、哲學雜誌大正二年十一月號に紹介せられて居る。孰れも心理學的性質に就ての見解に曖昧

と矛盾とがある爲めに、奇妙なる結論に陥つたものと評すべきである。

(イ) フォルケルトは、一方に於ては、超主觀的(客觀的)なるものから區別せられたる主觀的(意識的)なるものを心理學の研究對象と見、客觀的屬性に依つて説明せられぬ所の美は、主觀的(意識的)屬性に依つて始めて説明せらるべきである故に、美學は心理學でなければならぬと考へて居る。而して他方に於ては、意識現象に對象的(客觀的)方面と過程的(主觀的)方面とを認めて此意味に於ての客覺的屬性は主觀的屬性と共に兩ながら心理學的美學に包容せられてゐると見て居る。斯くして一方に於ては、意識現象を客觀的現象(若しくは超主觀的實在)から區別することに依つて、心理學の領分を確立し得る、従つて客觀的美學(自然科學的美學)及び形而上學的美學に反對して心理學的美學の主張を打ち立て得ると考へて居り、他方に於ては、意識現象に對象と過程との兩面を認むることに依つて、心理學を單なる意識過程の研究とする見解を駁し、而して心理過程の研究に過ぎざる所謂心理學的美學の難點から斯くして免れ得ると考へて居るのである。

美の研究は、ポール・ゴーチエの云つて居る様に、自然的客觀主義者及び超絶的客觀主義者 Objectivistes naturalistes, objectivistes transcendantaux の立場からして試み

られて居る間は成功の望がない。何うしても或意味に於ける主觀主義に依らなければならぬ。然し夫れと同時にモイマンが(此點丈けに於ては正當に指摘して居る様に、注意や觀念聯合や感情の過程の所謂心理學的研究が、美的特性を規定する原理を與へ得ぬことも明瞭である。フォルケルトが主張する美學即心理學の議論は、恰もモイマンが指摘する心理學的美學の弱點を避けて、而かもゴーチエーが云ふ所の主觀主義の正當なる立場に在るものとも見えるのである。然しながら、吾々の見る所に依れば、一方に於て客觀的なものから意識的なものを區別し、他方に於て、客觀的なものを意識的なものゝ中に包含せしめる所のフォルケルトの此見解は、この兩様の議論が別々に提供せられて居る間、而して唯其間丈け、二應正當なるかの如き觀を呈するに止まる。何故ならば、若し客觀的なものから區別せられた主觀的意識現象を取扱ふのが心理學であるならば、それは當然心理過程の研究に限らるゝものとなつて、對象及び過程の兩面(客觀的並に主觀的方面)を包容するものとは云へないであらう。若しまた意識の對象と過程との兩面を包容する研究を指して、心理學と呼ぶならば、さう云ふ心理學は客觀的屬性から區別せられた主觀的屬性のみを引き援くべ

き正當の理由を有せざるが故に、客觀的現象に對して主觀的、意識的現象を切り離すことは出来ない筈である。前者の如く見られた心理學は、獨り自然學から區別せられるのみでなく、總ての意識の對象に就ての學からも區別せられなければならぬ。後者の意味に解せられた心理學は、總ての意識の對象に就ての學を包容すべきのみでなく、自然學をも其中に包容すべきである。自然學と心理學との對立を認めながら而かも其の外に若しくは其中間に心理過程のみの研究に限らない所の、客觀的對象的方面をも包容する意識の學があり得ると考へ、而して之れを心理學と呼んで差支ないと考へるのは、畢竟自然を以て、一面意識を超絶せるものと見ると同時に、一面意識に與へらるゝものと見るのである。何故ならば、意識を超絶せるものとして自然を心理學から排除すると共に、意識に與へられたるものとして之れを心理學の中に取り入れようとするからである。超意識的なる自然なるものが經驗せられず又認識せられ得ざることを徹底的に考へ得た者に取つては、心理から超越する(若しくは區別せらるゝ)所の自然を認めることは出来ない、意識から超越する所の自然は之れを認めることが出来ない。此意味に於ては、意識の學は自然の學と對立すべき權利を持たない、

若しくは對立すべく謙遜する義理はないと云ふべきである。斯く考へて來るならば、美學が心理學か否かの問題は、心理學とは意識の學か若しくは自然と區別せられた心理の學か——此孰れを心理學の本義と見做すべきかに從つて全く相背反する二様の解答を夫々當然として受取らなければならぬことが明かであらう。而してフォルケルトの主張が此二様の心理學觀の混同の上に立つて居ることも明かであらう。——此兩様の心理學觀の孰れが正當であるか、又此兩様の心理學が夫々如何に研究の上に於て夫れ自身の正當なる領域を有するか、夫等の點に就ては、吾々は今此所で何等の論述を試みようとするのではない。唯此二様の心理學があること、心理學に就て此二様の見方があり得ることを明かにして、而して此二様の見方を混同することの誤謬を指摘した丈けである。然し少くとも心理學が(其對象の上に於て)所謂客觀的現象の學殊に自然の學から區別せられ、而して夫故に(其方法の上に於て)自然科学的——ハイマンの語を借りて云へば、經驗的反應學的——に研究せらるゝ學であると見做さるる限り、心理學は美學を包容することの出來ない所以は明瞭であらう。

(ロ)

モイマンの論文に至つては、其中に現はれて居る多くの矛盾と混亂とは、今一々

指摘する必要もない位に何人の眼にも明かだと思はれる。注意すべき主要なる事柄は、モイマンが心理學的美學の難點として摘發する所のものは、心理的過程の學としての心理學、而かも所謂内省法のみに依る個人心理學に屬するものであると云ふ點、及びモイマン自身が實はやはり心理學的美學を主張する者に外ならぬと云ふ點此二つである。心理學的研究法に對して、夫れと同等の地位を美學に占むべきものとモイマンが主張する客觀的研究法の必要は何人も之れを承認するであらう。所謂心理的過程の而かも個人的内省法のみに基ける研究が美的態度の特性を規定し得ないと云ふこと、寧ろ逆に此特性を假定し前提して始めて斯かる研究が可能なることは云ふ迄もない。夫故に心理學的美學は美學の全部であり得ず、モイマンの云ふ如く、明かに其限界が劃せられ得るであらう。然しながら夫れと同時にモイマンの意味して居る客觀的研究法も亦決して夫のみでは、美的態度の特性を規定する力を持つて居らない。加之彼の所謂客觀的研究と心理學的研究との兩面を併せた所で、夫れでも尙美的態度の特性は規定し得られないのである。此一見奇妙なる結論は、モイマンが客觀的研究法と主觀的研究法とを同等の地位を有する對等なる研究法 *Koordinierte*

Methoden と見做すことから當然に斷定せられなければならない。何故ならば、若しモイマンの論ずる(而して正當に論ずる)如くに、心理學的研究には特に美學的なる見地 *der spezifisch aesthetische Gesichtspunkt* が無く、而して若し此『特に美學的なる見地』が客觀的研究法に依りて始めて與へらるゝのであるならば、客觀的研究法は決して心理學的研究法と相補ふ所の對等的なるものでなくして寧ろ客觀的研究法が即ち美學的研究法(特に美學的なる若しくは唯一の美學的なる研究法)だと云ふべき筈である。之れに反して、若し客觀的研究法も亦心理學的研究法と同等なる地位を美學に占むるもの(占むるに過ぎざるもの)であるならば、『特に美學的なる見地』は、客觀的研究法に依つても、心理學的研究法に依つて、と同様に、與へられ得ない筈である。換言すれば、此兩面の研究法以外若しくは其根柢に『特に美學的なる見地』を與へる所の第三者が無ければならない筈である。吾々はモイマンの論ずる如くに、心理學的美學の限界を承認すると共に彼の所謂客觀的研究法の必要をも認める。然し『特に美學的なる見地』は何に依りて與へらるるかの問題は之れに依つて解決せられぬことを忘れることは出来ないものである。而してモイマンの此點に關する見解を檢査した結果、彼がヨナス・コ

ンの所謂價值學としての美學に對して自説を區別して居る個處に明瞭である如く、吾々は彼が畢竟は心理學的美學を主張する者なることを發見するのである。モイマンは云ふ

Ich nehme ferner an, dass auch dieser (der spezifisch aesthetische Gesichtspunkt) in letzter Linie erst rein psychologisch erlebt werden muss, dass guter und schlechter Geschmack auf Unterschieden in den psychologischen Erlebnissen beruhen, dass diese Gesichtspunkte, selbst wenn man sie als Wert oder Norm betrachtet, ohne die vorausgehende psychologische Untersuchung gar nicht näher bestimmt werden können, weil alle Normen und Werte unmittelbar und primär erlebt werden müssen, und psychologische Tatsachen sind, die als solche auch in den Bereich der psychologischen und speziell der psycho-genetischen Untersuchung fallen. (Mernmann, Grenzen der psychologischen Aesthetik, S. 148)

(二) リップスの考へて居る心理學がフォルケルトの夫れと異なり、又モイマンが其限界を劃定せんとした心理學とも異なることは、今改めて云ふ迄もない。從つてハイマンが心理學的説明の一つとして感情移入を當然不十分だと論じて居る點に就ては、心理學的説明が不十分なることを承認しつつ、而かも感情移入説

が不十分でないと思へるとは出来る。吾々は寧ろハイマンが(後節叙述する如くに)感覺的内容の其自の意味 *Eigenbedeutung* des *Wahrnehmungsinhaltes* と呼ぶ所のものは、主要なる點に於て、リップスの感情移入の考と趣を同じくするものであると考へる。尤も一方に於ては、美的感情移入を一般的感情移入から如何にして區別するかの問題は重要な問題であつて、實は此如何に區別するかの理由如何に依つて感情移入の正濁二様の概念が別れ、正當なる感情移入説と俗解せられたる夫れとの別が生ずるのであると云ふべきである。而して其問題は恰もハイマン自らの考に就ても、所謂感覺的内容の其自の意味と依地的意味との區別及關係は如何若しくは一般に如何にして又何故に種々なる意味の領域があるかと云ふ問題として、根本的問題の一となるのである。夫故にハイマンの此非難に對しては、ハイマン自身が如何に彼意味の領域を(彼の所謂認識論的及び現象學的に)根柢付けるかを反問するのが當然である。何となれば其に依つて彼の非難は始めて論議に上ぼさるべき十分の理由を具備することゝなるからである。夫れ迄はハイマンの解する感情移入は正當に殊にリップスに依つて意味さるゝ感情移入ではないと云ふ丈けに止めて置いて差支ない。若しハ

イマンが感情移入を以て、或主觀的内容を客觀的形式に附與し注入するものと解して居るならば、而して美的感情移入を他の感情移入から區別する特徴を彼が要求して居るのは、即ち斯く解して居る證據ではないか其誤解たることは、恰もハーマンの所謂感覺的内容の其自の意味を以て、客觀的形式其物が客觀的なものとして有する意味と見做す者の陷ると同じ誤解だと云ふべきである。

尙詳しく云へば、ハーマンが感情移入に對して、それは或主觀的内容を客觀的形式に附與することとなるが故に、夫れ丈では美的特性の規定として不十分であると評して居るのは、恰もハーマンの主張する感覺的内容其自の意味に對して、それは客觀的形式が客觀的形式として有する意味に過ぎざるが故に、夫れ丈けでは美的特性の規定としては不十分であると非難するのと同様であつて、共に誤謬たることを免れない。――

之れを要するに、吾々は此所で一方に於ては、ハーマンの論ずる如く、反應學若しくは經驗的科學としての心理學は美的特性を規定し得ぬことを承認し、他方に於ては、ハーマンの感情移入説に對する非難の效力は、必しも正當に解せられた感情移入説には届かないことを指摘して置きたいと思つたのである。而し

て上に述べた所から此二點及び之れに伴つて(一)心理學は反應學的に解せらるる外尙他の見られ方があること及び(二)反應學としての心理學も亦云ふ迄もなく自ら其として正當の價值と意義とを有し、美學の領分内に於ても、其權限内に止まる間、やはり正當なる存在の權利を持つて居ること、是等の二點も亦明瞭になつたらうと思はれる。

三

上述の如く美的なるものが、所謂經驗的科學即ち反應學が規定する意味の諸領域に屬しないことは明瞭である。然らば美的なるものは、是等の意味とは全く異なつた或別の意味の領域を占有するものでなければならぬ。夫れは何であるか。ハーマンは次の如くに論を進める。

美的なるものとは、恐らくは、一つの特殊なる意味の領域 *ein besonderes Gebiet von Bedeutungen* なのではないか。恰も自然科学的意味に依つて、『與へられたるもの』が自然科学的對象となる様に、美的意味とも云ふべきものに依つて、吾々の經驗する所のものが始めて美的對象性を有し來るのであると考ふべきではないか。而して『與へら

れたるもの』は、夫々の意味の領域に組み入れられるに従つて、或は物と意味附けられ或は疾病或は道德的行爲若しくは信念と意味附けられるのであるが、美的に捕捉され或は美的に意味あるものと見られたる場合には、夫等の意味から全く離れた一つの特殊なる意味の領域に屬するものであると考ふべきではないか。さう尋ねて而して此問題を現象學的に考察して行くならば、其所で始めて吾々は美的なるもの、一種特有なる性質を明かにすることが出来るのではないであらうか。

直接所與が、如何にして諸種の意味の領域に組み入れられるかを考へて見るならば換言すれば、直接に與へられたるもの即ち感覺内容 *Wahrnehmungsinhalt* と夫れに結び附く所の内容 *ihm folgende Inhalte* との關係を現象學的に檢査して見るならば、其意味即ち内容なるものは、總ての對象的感覚の場合に於ては、常に感覺到續いて來たる所のもの、而して感覚は單に其記號たるに過ぎぬ所のものに依つて規定せられて居ることを發見する。感覺到續いて起る所のもの、而して感覚が單に其記號たるに過ぎぬ所のものとは、或場合には、即時に起る動作たることもある。例へば其物を攫かむこと或は手放すことか、或は空間に於ける一つの運動とか、醫療的援助とか、或は道德的考察であることもある。又或場合には單に言語を以て云ひ現はされ得る判斷た

ることもある。否寧ろ恐らくは總ての場合に於て感覺に續いて起る所のは、常に兎も角も、一つの判斷であると思ふと出來よう。一つの感覺内容は、夫故に、總ての對象的感覚 *Objektwahrnehmung* に於ては、判斷を待つて始めて一つの意味を有し來るのであり、感覺内容其自らは單に此判斷の爲めに存在する記號たるに過ぎないものである。此の如く感覺内容が、夫れに續いて起る所の判斷に對する記號たるに止まると云ふ事實——換言すれば感覺内容が其意味を其自身以外の他のものに置いて居ると云ふ事實を、吾々は感覺内容の依他的意味 *Fremdbedeutung des Wahrnehmungs Inhaltes* と名づける。斯かる依他的意味に依り、而して概念の助を借りることに依つて、始めて、一つの感覺内容は一つの自然科學的、倫理的、社會的、乃至宗教的對象となり、或はまた同一の感覺内容が一つの對象の種々なる性質ともなるのである。であるからして、依他的意味の諸領域に於ては、畢竟感覺内容其者の特性は何等の意義も無いものと云ふべきである。換言すれば、如何なる感覺内容も其自らが有する特性の如何に拘はらずして、或一つの依他的意味の領域に組み込まれ得るのである。同じ一つの感覺内容例へば同じ一つの色が客觀的對象的には異なりたる種々の意味を有し得る事實、及び夫れとは逆に、感覺としては異種類なるものが夫れにも拘は

らず同じ一つの對象の記號となり、同じ一つのものを意味し得る事實(例へば諸方から見た姿は異なるに拘はらず同一の樹を意味するが如き、聽覺や視覺や觸覺が同じ一つの物體の運動を意味する如き)は、明かに依他的意味の領域が全然感覺内容其自らの持つて居る特性と關係無きことを示して居るではないか。

然しながら夫れと同時に、感覺内容は必しも常に依他的意味の記號としてのみ意味を有するばかりではなく、感覺内容が感覺内容として意味を有し來るとのある事實は觀過せらるべきではない。例へば吾々が或形を見或音を聞いて之れに沈潜し、吾々の注意を全く其形其音に向け、そして其所に感ぜらるゝ快若しくは不快に身を任かせる場合の如き、或は又依他的意味の上から云へば同一であり優劣もなく區別もせられぬ所の諸種の感覺内容を、感覺内容(例へば視覺聽覺又は觸覺の形像として之れを區別し且つ其一を他よりも好ましとする場合、是等の場合の如きは即ち感覺内容が其依他的意味に基いて順序附けられるのでなくして、其自らの意味に於て認めらるゝのである。之に於て吾々は(是等の事實を否定し得ざる以上)如何なる條件の下に、感覺内容は其自らの意味を有し來るのであるか。如何なる場合に感覺内容は他の目的の爲めでなく、其自らが目的となるのであるかといふ問題、即ち感覺内容

の其自らの意味 *Eigenbedeutung des Wahrnehmungsinhaltes* に就ての認識論上の問題に逢着せざるを得ない。而して吾々の見る所に依れば、此問題を取扱ふ所の學が即ち美學である。美的とは其自らの意味を有し來れる感覺内容——即ち或依他的意味に係して客觀化せられたのでなく概念的に統一せられたのでなくして、自然の對象として、なく、一つの形像に統一せられ、而して意味あるものとなつた所の感覺内容に外ならぬ。Aesthetisch bedeutsam ist ein Wahrnehmungsinhalt, der nicht in Beziehung zu einer Fremdbedeutung objektiviert wird, nicht begriffen, d. h. begrifflich vereinigt wird, sondern in sich zu einem Gebilde (an Stelle des Gegenstandes der Natur) vereinheitlicht und bedeutungsvoll wird. Aesthetisch ist der eigendedeutsame Wahrnehmungsinhalt. (S. 118)

斯く考へて來るならば、吾々の總ての概念構成及認識の範圍に於ては、感覺は單に概念的に構成せられたるもの、記號たるに過ぎないものであつて、從つて其意味は感覺其物以外に在る所の目的若しくは行爲に依つて與へられるのに反し、美的なるもの、領域に於ては、感覺は其自ら意味を有する、若しくは其自らが目的なのであると云へやう。然し此際吾々の觀過してはならない重要な點は、感覺内容が其自ら意味を有すると云ふとは、云ふ迄もなく、視覺や聽覺や觸覺の形像、其者が其自らの意味

を有すると云ふことであつて、是等の感覺に依つて其儘與へられるかの如く思はれて居る所の(而して實は吾々が感覺から超越して推論し判斷した結果始めて出來上るのである所の)對象に就て、夫れが其自らの意味を有すると云ふことではないと云ふ點である。例へば鹿の疾走する姿の美しさを感じずる時、其美しさとは即ち感覺内容が其自らの意味を有すると云ふことである。然しながら其場合に吾々が之れを鹿の美しさと言ふのは、概念的客觀的對象的に意味する所の鹿が其自らの意味を有すと云ふことではない。吾々の指して美しいと言ふ所のものは、鹿と云ふ對象ではなくして、其所に現に在る所の感覺内容である。此感覺内容が鹿と呼ばれるゝ對象の一つの現はれであるか否かは吾々の知るを要しない事柄である。吾々の見る所のものは鹿ではなくして、云はゞ一つの幻である。まぼろし唯此幻が自然科學的意味の立場から解釋せらるゝ時鹿と呼ばれるゝものに關係せしめられると云ふに過ぎない。夫故に美的に見らるゝ場合、其自らの意味を有すと吾々が云ふ所のものは感覺内容、其物であつて、對象ではない。對象其自らの有する意味とは即ち其物の有する個性云はば其人格であつて、それは感覺内容を物心的對象として意味附けた結果、即ち依他的意味に基いて之れを解釋した結果に外ならない。而して對象の個性若しくは人格と

して、それは倫理的意味の領域に属すべきものであらう。

正誤 前回本誌一月號掲載の一の下に設けた見出し『反應學と純粹記述學』とあるを削除す